

ルイズにキリトが使い
魔として呼ばれたら？

電(いなずま)

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一万人を巻き込んだ恐怖のデスゲーム… ソードアート・オンライン通称SAO。

そのデスゲームを終わらせた少年「桐ヶ谷 和人」は使い魔としてゼロの使い魔の世
界に… 少年は何を思い、なにをするのか…

作者は設定を変更しています！

・キリトは誰とも付き合つていません

・登場人物の性格変更

可笑しい点やアドバイスお願いします^ ^

目

次

5 第4話 第3話 第2話 第1話

16 13 9 5 1

第1話

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

？「良し！今日はここまでにするかな？」

そうして俺は剣を背中に仕舞う。

俺は桐ヶ谷 和人。黒の剣士とか呼ばれているが、正直そんな呼び名は遠慮したい。

今日は、壊れたパソコンを取りに行かないといけないから早めに落ちる事にする。何時までもインターネットカフェ通いは嫌だからなあ

街

「ありがとうございます！」

店員からパソコンを受け取り店を出る。

無事にパソコンも直つたことだし、早く家に帰つてさつきの続きをでもするか！

ん：なんだ？あの穴は：

「何で出来ないのよお～！」

ルイズ said

私は、ルイズ。今は使い魔召喚の授業をしている所なんだけど…

「お前まだ出来ないのかよww流石「ゼロ」のルイズだな！」

皆は出来てているのに私だけ召喚出来ていない…もし、もし！このまま召喚出来ないと進級出来なくなっちゃう。

？「ミス・ヴァリエール、これで終わりにしても良いですか？」

ルイズ「待つて下さいコルベール先生！あと一回…あと一回だけお願いします!!」
そう言つて私はお願ひする。進級できないなんて嫌だ！

コルベール「分かりました、ミス・ヴァリエール。あと一回だけですよ」
ルイズ「ありがとうございます、コルベール先生」

私は残されたチャンスはあと一回だけ、失敗は許されない…

何でも良い、何でも良いから何か出てきて!!

「我が名は『ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール』五つの力を司るペンタゴン。我が運命に従いし”使い魔”を召喚せよ！」

私は精一杯杖を振り下ろした…

和人 side

路地の壁にに大きな穴が開いていた。

「これは一体何なんだ？普通じやないよなあ！」

俺は好奇心に負け、近づいて行つた。

試しに地面にあつた石を入れてみた……が落ちた音は聞こえない。次に腕を入れてみるが、特に何も無い。

「入つてみても大丈夫……か？」

悩んだ結果、俺は入つてみる事にした……

——ルイズ side ——

ドガアアアアアアン

魔法を唱えると爆発がおきた

失敗、失敗したの？

「やつぱり『ゼロの』ルイズだな！なんも出来やしないwww」

そう、私は何の魔法も使えないもんね……

「ちょっと待て……何かいるぞ？」

えつ・・ 成功したの？

？ 「いってえ、何なんだ一体？」

人の声？

少年の声だつた

「おい！ 「ゼロ」 が平民を召喚したぞ www」

よく見て見ると、そこには黒髪で見たことない服を着た少年がいた。

「あ、あんた誰?」

こいつは一体何者?

第2話

「あ、あんた誰?」

目の前に桃色の髪の少女がいた。

えっと… これはどういうことだ? 取り敢えず、一旦状況を整理しよう!
ALOから出る→店でパソコン受け取る→変な穴見つける→入る→現在
つておい! 自分の所為じやないか!!

ルイズ 「だ、だからあんた誰なのよ!!」

和人 「俺? 俺は桐ヶ谷和人…」

ルイズ 「何処の平民なのよ!」

平民? それ言うなら君もじゃないか?

「ルイズ」「サモン・サーヴァント」で平民を呼び出してどうするの?」

誰かがそう言うと周りの人全員が笑う。

ルイズ 「ちょ、ちょっと失敗しただけよ!」

「いや、ちょっとどころかいつつも失敗ばつかじやん」

「流石は「ゼロ」のルイズ、期待を裏切らないねえ!」

その言葉により爆笑が起る。

どうやらこの女の子はルイズと言うみたいだ。

ルイズ「コルベール先生！もう一回召喚させて下さい!!」

召喚？此処つて現実世界だよな……一体どうなつてるんだ？

コルベール「其れは駄目だ。ミス・ヴァリエール」

ルイズ「どうしてですか!?」

コルベール「決まりだ、此れは決まりなんだよ。2年に進級する為に君達は”使い魔”を召喚する。」

使い魔？一体何のことだ？

「其れにこれは神聖な儀式なんだ、彼を使い魔にするしかない」

ルイズ「で、でも！平民を使い魔になんて聞いたことありません!!」

コルベール「ミス・ヴァリエール、これは伝統なんだ君だけ特別と言う訳にはいかない。呼び出した以上、平民かも知れんが君の使い魔になつて貰わなくてはな」

ルイズ「そ、そんな…」

コルベール「では、儀式の続きを…」

ルイズ「ねえ？」

和人に向けて声をかけた

和人「はい」

ルイズ「か、感謝しなさいよね！貴族にこんな事されるなんて普通は無いんだから!!」

貴族？貴族って大富豪とかのか？

ルイズ「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。五つの力を司るペンドragon。この者に祝福を与える我的使い魔となせ」

呪文らしきものを唱えたあと、唇を近づけてくる少女

和人「な、何をするんだ」

ルイズ「い、いいからじつとしてなさい」

え、まさか…

「ん…」

契約つてキスだつたのか!?直葉にさえして無い俺のファーストキスが…
「終わりました」

顔を真っ赤にしながら言う、どうやら照れているみたいだ。

和人「て、照れるのは俺の方だ！きゅ、きゅ、急にキスされて!!」

ルイズ「しょ、しょ、しようがないじゃない！そうしないと契約出来ないんだもの!!」
さつきから契約つて何のことだ？

和人「ぐつ！ぐああああ!!!」

な：ん：だ！いきなり… 身体が熱く…

ルイズ「大丈夫？今使い魔のルーンが刻まれているから…」
刻むつてなんなんだよ…

暫くして

やつと痛みが引いた… 気付いたら周りの人達は居なくなつていて少女——ルイズだけが居た

和人「なあ、一つ聞いていいか？此処は何処なんだ？」

少なくとも俺の知つてる現実世界じやない、魔法とか使い魔とか聞いたことない…

ルイズ「此処はトリステイン魔法学院よ。そして私はルイズ・ド・ラ・ヴァリエール。
使い魔になつたあなたの主人よ」

… いつたいこれからどうなるんだ？

第3話

「前回までのあらすじ」

俺は桐ヶ谷和人。ALOから出て、パソコンを取りに行つた帰りに好奇心に負け不思議な穴に入つてしまい、異世界に飛ばされてしまった。目の前には自分の主人と名乗る桃色の髪の女の子「ルイズ」に会い、そして此処はトリステイン魔法学院という所らしい

和人「驚くかも知れないと、どうやら俺は異世界から来たみたいなんだ。」

（トリステイン魔法学院なんて聞いたことが無い、だとしたらやつぱり俺の知つてゐる世界じやないんだろう‥‥）

ルイズ「異世界から来たつてどういう事よ！」

（でも、見たことのない服を着てるし‥‥）

和人の今の服装は黒のジーパン、シャツ、コートという見事な黒一色だつた。

和人「えっと、俺はこのトリステイン魔法学院？つて所を知らないし、第一、俺は街にいたんだ。いきなり学校に居たらおかしいだろ？」

ルイズ「そう、取り敢えずあなたのいう事を信じるわ。」

和人「信じてくれるのか？」

ルイズ「言つとくけど取り敢えずだからね！」

和人「取り敢えずでもいい！それで…俺は君の使い魔だっけ？使い魔つて何をすればいいんだ？」

ルイズ「使い魔になつた者は主人が見ているものが見えるの。それに、秘薬を作る材料を探したり、主人を守つたりね。」

（まあ、見た所平民だし何も出来ないでしようね…）

和人「秘薬を作る材料を探すのは無理だけど、守るのは出来るぞ。」

ルイズ「守れるつて…あんた騎士なの？」

（戦えるんだつたら、なんとかなる…のかな？）

和人「騎士じやないけど、騎士にも遅れは取るつもりは無い。」

そう言つた彼の瞳は歴戦の戦士の様であつた

ルイズ「取り敢えず、部屋に行きましょう。此処の事教えてあげるから。」

ルイズの部屋にて

ルイズ「此処が私の部屋よ、早速だけ説明するわね。」

和人は色々と教えて貰つた。この国のこと、魔法のこと、貴族のこと、そしてルイズのこと。

和人「えつと、つまり君は公爵家の三女でこのトリスティエン魔法学院の生徒で良いの

か？」

ルイズ「まあそうよ。後、君じゃなく「ルイズ」って呼びなさい。あなたの事ももうちょっと詳しく聞かせて頂戴。」

和人「ああ、ルイズ分かつた。」

和人はルイズに説明した。地球という星の日本という国に住んでいて、高校2年である事（ここでいう16歳）車という乗り物があるということ、唯あのデスゲームについては喋らなかつた。

ルイズ「なるほどね、大体分かつたわ。… あらもうこんな時間、もう寝ないと…」
そう言うとルイズは困った顔になつた

ルイズ「ああ、どうしよう… あなたの寝る場所が無いわ。」

和人「俺なら良いよ、床で寝とくから。」

（本当は嫌だけど、相手は女の子だ。此処は平気なふりをしどくべきだろう）

ルイズ「そう？明日にでも学院長に話を付けて見るわ。」

そう言うとルイズは突然服を脱ぎだした

和人「な、何脱いでんだよ！」

慌てながら言う

ルイズ「そうじやないと着替えられないでしょ？」

彼女はさも当然の事のように言う

和人「それでも！使い魔だとはいえ俺は男だ！俺は出ておくからその間に着替えてくれ！！」

彼はそう言うとさつきと行ってしまった

ルイズ 「あ…あ…いやあああああ!!!」

彼女は一つ忘れていた、彼は使い魔である以前に「男」である事を…

第4話

何だつていきなり着替え始めるんだ？俺だつて健全な男子高校生な訳で……。
まあ、この際この学院の中でも探索してみようかな？
探索と言えば、S A Oの誰もマッピングしていないエリアを進んでいくあの感じは忘れられないな……。

廊下ですれ違う生徒からの目線を受けながらも探索していくとこちらに向かつて歩いてくる生徒がいた。

「あら、あなたルイズの使い魔じやない？」

そう言つて来たのは、燃えるような赤い髪の女の子だつた。その女の子はルイズよりも背が高く、胸もルイズより遥かに大きかつた。

「（で、でかい：直葉よりあるんじやないか？）あ、ああ」

ブラウスの上のボタンを外しているので男としてはついつい目がいつてしまう。

「あつはつは！ほんと人に間なのね！私はキユルケ。まさかルイズも人間を召喚するなんてね」

そう言う彼女……キユルケは、小馬鹿にした感じだつた。

「あなた、お名前は？」

「俺は、桐ヶ谷 和人だ。」

「キリガヤ、カズト？ 変な名前ね？」

「大きなお世話だ！」

「それじやあね、ルイズの使い魔さん。」

そう言つてキュルケは去つていつた。その後探索を続けたが進展は食堂があつたぐらいだった。

——女子寮——

ルイズの部屋の前には來たけど……

あんなことがあつたから入りづらい！ええい！もうどうにでもなれ！

ドアをノックして「は、入つて大丈夫か？」「う、うん。」

ドアからは先程とは違ひ元気の無い声が聞こえてきた

「じゃあ……入るぞ？」

其処には着替え終わつてベットに座つている女の子がいた

先程とは違ひ弱弱しい姿は、一言……かわいかつた。

「え、えと、今度から着替える時は言つてくれ、そしたら俺は外に出てるから」「わ、わかつたわ……それであんたの寝るところなんだけど……」

「俺は外で寝とくから、気にしなくていいよ」

「で、でもそれだと体調崩すし、何より使い魔を外に出してたら私が馬鹿にされちゃう！」

そう言う彼女は必死だつた

「い、いやでも… それじゃあ俺は何処にいればいいんだ？」

「あ、あんたが何もしないって言うんなら… ベットで寝てもい、いいわよ？」

恥ずかしいのか、顔を赤らめながらルイズは言つた

「い、い、いや其れは駄目だ！ だつたら学院長に言つて寝る所無いか聞いてくるよ」

そう言つて和人は部屋から出ようとするが、彼女の言葉が彼の歩みを止める

「ま、待つて！ つ、使い魔は主人と一緒に居ないと駄目なの！ だから… だから。」

もう大人しく従つた方がいいと思つた和人は一言「わ、分かった、でも、俺は床で寝るからな！」と言つて部屋の隅っこで寝転がつてしまつた。

こうして、トリステインに召喚されて1日目が終わつた

二日目の朝、いつもとは違う景色を見て夢じやなくて現実ではないということを改めて確認した。そしてここでは俺は「平民」なので貴族の言うことは絶対：なので気を付ければ。まあ昨日の様子を見るからにルイズはそんな無茶苦茶なことを言いそうにはなかつたけど、他の奴はそうもいかないよな…

「さて…ルイズはまだ寝てるかな？」

そういうつてルイズのベットの方へ向かうと、まだ寝ていた。その寝顔はかわいいものでこの子がゲームではなく現実で魔法を使う子なのだとと思うと何とも言えなくなる。

「まあ、ルイズを起こすとするかな？おーい、朝だぞ？起きろよ～」

ルイズに向かつて言つてみるが、反応はない。どうも熟睡していて聞こえないようだ…それなら…と布団を勢いよくはがしてもう一度起こす。

「ふえ!?えつ何！何があつたの!？」

寝起きでなのが、ルイズは状況を把握できていらないようだ。

「起きないから布団はがしただけだよ、おはよう、お嬢様?」

「な、なんだ：和人じやない。朝から驚かせないでよ…」

「お嬢様が起きないのが悪いんですよ。さあ外に出とりますから準備してくださいよ？」

からかい交じりの言葉を言うとさつさと出て行ってしまう。

「うん…取り敢えずは着替えようかな？」

それからしばらくして、着替えが終わつたルイズと和人は朝食を食べに食堂へと向かつていた。すると…

「あら？ おはよう、ルイズ。そしてルイズの使い魔さん。」

「おはよう…キュルケ」

「おはよう…キュルケ」

「あれ…和人、キュルケのこと知つてるのかしら？」

「なんで和人、キュルケのこと知つてるのかしら…」

「ああ、昨日会つて話したんだ。ところでそのこはキュルケの使い魔か？」

「そう、私の使い魔フレイム、微熱の私にはぴつたりの子よ！ ルイズも平民だけどいい男召喚したわよね。…狙つちやおうかしら」

…キュルケからの目線がキツイ、ここは早く行つたほうがいい気がする。

「ル、ルイズ。そろそろ朝飯食べに行かないか？俺腹ペコでさ！」

「そうね、私もお腹が空いたし行きましょーか。キュルケまたね。」

これ以上キユルケといたら和人が危ないし……ね?

食堂についたのはいいのだけど一つ問題が出てきてしまった。

「和人の朝ごはんがないのを忘れていたわ……」

このままじゃ、和人のご飯が……私の馬鹿! なんでこんなことに気づかなかつたのかしら。

「ああ、俺つてルイズの使い魔だもんな。なくともしようがないさ、俺は厨房に行つてみるよ、じやあルイズまた後で!」